

研究ノート

生活ノートの教育的効果とその意義 —全行書きを1年間継続することを通して—

岸田 幸弘・吉岡 典彦

The Educational Effects of Life Notebooks and Their Significance: Through One Year of
Writing All the Lines in a Notebook

KISHIDA Yukihiro and YOSHIOKA Norihiko

要 旨

中学校で実践されている「生活ノート」の活用には、教師たちは様々な教育的な意義を感じながら生徒たちに取り組ませていると思われる。しかし、慣例的に毎年実施しているからというだけの理由で安易に取り組ませるために、生徒にとっても教師にとってもあまり意義の感じられない教育活動になっている実態もある。そこで生活ノートへの記述の意義を生徒に理解させ、確実に返事を書き添えながら生徒たちと交流を重ねた教師の実践について、生徒への質問紙調査を実施した結果、「自己洞察のツール」「継続の大切さ」「周りを見る目の向上」「踏み出すことの大切さ」「目標設定の重要性」「将来への決意」など「生徒が自らの成長を感じることで」ができるツールとしての生活ノートの機能が示唆された。

キーワード

生活ノート 全行書き コミュニケーションツール

目 次

- I. 問題と目的
- II. 方法
- III. 生活ノートの教育的意義
- IV. 全行書き生活ノートへの取り組み記録
- V. 生活ノートに対する質問紙調査
- VI. 全体考察

文献

I. 問題と目的

筆者ら(2021)¹⁾は中学校における学級通信の教育的効果を検証するために、学級通信を毎日発行した実践事例を報告した。この実践報告では、学級通信の教育的な意義を事例や生徒らのアンケート調査を通して分析し、その結果として「保護者との連携」、「子供との信頼関係」、「教師の資質向上」などを構築するためのツールとして機能していることを報告している。しかしながらこの事例の学級通信は、学級担任が保護者や生徒に向けて一方的に発信するという一般的な学級通信とは趣が異なり、生活ノートと連動させている点が特異的であった。つまり生徒が毎日記録して学級担任に提出する生活ノートに対して、担任が真摯に向き合って、長文の返信コメントを添えて返却していたのである。一方、生徒には記録スペースの全行にわたって文章を記録することを求めている。そして毎日発行する学級通信には、全行書き生活ノートの内容(生徒の記述と担任教師のコメント)を掲載し、さらには毎朝の短学活(ショートホームルーム)でそれをクラス全員で読み合わせをするといった実践であった。したがって単に学級通信の在り方についての考察というよりは、本実践事例の分析からあるべき学級通信発行の意義を再確認した報告となっている。一方で、連動している生活ノートそのものへの取り組みについては、必ず全行書くことや毎日提出することを求めるなどの実践の仕方やその実態には触れたものの、なぜそうした取り組みが可能になったのか、1年間それに取り組んだ生徒の意識や、生徒個人と学級集団の成長、教師との関係性の変容などについて分析・考察はしてこなかった。

そこで本稿では学級通信と連動した生活ノートへの取り組みそのものに焦点を当て、生活ノートの機能、教育的な効果、取り組ませるための工夫等を、生徒の意識調査と学級担当教師の教育理念等を併せて考察し、教育活動における生活ノートの実践的な意義を探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

1. 第2筆者による全行書き生活ノートの実践記録の整理

2. 生徒への質問紙調査

III. 生活ノートの教育的意義

中学校において全国的に用いられている生活ノートについては、生徒と教師とのコミュニケーションツールとして、感情交流や受容感の促進、あるいは生徒指導での活用などが報告されている。特に野木(2019)²⁾は生活ノートとは「翌日の予定や持ち物等の連絡を記入できる箇所と生徒が1日の生活記録を自由に記述できる箇所があるノートのことである。」と説明した上で、「全国的に多くの中学校で生活記録ノート(本稿では生活ノート)が教育活動に用いられているものと推測される。」として、生徒の記述から生活ノートの機能を整理し、その機能を高めるための教師の役割行動を明確にしようとしている。それによれば生活ノートの機能には「生徒理解のための1つの手がかり」「コミュニケーションツール」の2つがあり、それらは日々の取り組みにおいてお互いに影響し合っている。また2つの機能を高めるために教師に求められる役割は、書かせる意図の明確化と目的意識をもたせる「生活ノートを用いる以前」と、生徒の記述を受容したりまとまった文章を書く指導を行ったりする「日々の取り組みの中」にあるとしている。生徒理解のための1つの手がかりとしての生活ノートは、生徒の不安や悩みを知るための手段となりうるため、いじめや不登校への対応法としての活用が紹介されている。

各自治体においても生活ノートの活用を推奨している例がある。岐阜県教育委員会(2015)³⁾は「心の架け橋」と題した生活ノートの活用に関する冊子を発行している。同年6月には岩手県でいじめ事案が発生した。この事案では、生徒の書いた生活ノートへの教師のコメントが話題になった。この心の架け橋には、生活ノートを活用することの意義や子どもの記述の捉え方、コメントを含めた教師の反応の仕方について、具体的な場面を提示しながら詳しく解説されている。また生活ノートを学級経営に位置付けている現場教師からの報告も載せられている。さらには、連携を図るとよい関係機関までもが提示されている。生活ノートを活用することで子どもたちの内面に存在する様々な思いや悩みなどを知り、その時々に応じた適切な対応をしていきたいという願

いを感じ取ることができる。

また、千葉県教育委員会(2018)⁴⁾では、不登校支援について網羅的にまとめた「千葉県版不登校児童生徒の支援資料集」を作成している。不登校への具体的対応例や未然防止の取り組み、専門家によるコラムなど、幅広い内容となっている。この中で生活ノートは、初期対応に関する記述の中に登場する。教育相談をより充実したものにするために、児童生徒との感情交流のためのツールとしての活用法が紹介され、留意点が示されている。

一方、心理的な成長の側面から生活ノートを分析したのが竹島(2013)⁵⁾である。彼は、中学生の心的安全空間を広げる手立ての1つとして、自分の感情を言語化することを意識した中学生と学級担任との「交換日記」を実践した。生徒の視点からは、受容されることで安心感をもち、自分の感情を練ることや学級担任との感情交流を楽しんでいることが示唆された。学級担任の視点からは、実践が進むにつれて助言や励ましが減り、個人的な意見や体験談が増えていることから、教師自身の心的安全空間が広がっていることが示唆された。生徒と学級担任との関係性の視点からは、生徒が自分らしさを表現していく中で、感情の分化が進んだり、不安な気持ちを表現できるようになったり、自己内省の深まりが見られたりするなど、意味のある学習が展開されたことが示唆された。言語表現が苦手な生徒への対応や教師がコメントを書く時間を確保することへの難しさ、教師が生徒に対して共感したコメントを返すことの少なさなどの課題も同時に指摘されているが、生徒の心的安全空間を広げる手立てとしての「交換日記」の有効性が示されている。竹島のいう交換日記は、「中学生が感情を言語化する手立てとして、多くの中学校で実施されている個人日記の活用が考えられる」とあることから生活ノートを指していると考えられる。竹島の先行研究は、生活ノートが教育相談的な機能を有することを示唆するものであろう。

また渡部(2017)⁶⁾は、生徒指導の視点だけではなく、キャリア教育の視点からの活用を提案している。生活ノートを媒介に教師と生徒はつながっているため、教師は生徒理解の意識だけでなく、キャリアカウンセリングによる支援も意識していくことで、生徒のキャリアプランニング能力を高めようとした。PDCAサイクルを重視した生活ノートの記入方法の

工夫と、教師がモチベーションマネジメントで重視されている3つの実感(つながっている実感・できている実感・伸びている実感)を特に意識し、強調することで、キャリアプランニング能力に関する生徒の自己評価が高まったとしている。

野木の指摘や岐阜県教育委員会、千葉県教育委員会の指摘は、どちらかと言えば教師が生徒を理解し、指導に生かすための活用に重点が置かれているのに対して、竹島や渡部の指摘は生徒と教師のインタラクティブ(双方向)な関係性の中に、生徒自身の心理的な成長を促す側面を指摘しているようである。このように生活ノートは教師と生徒とのコミュニケーションツールとして、さまざまな教育活動を支える基盤として機能しうるのである。

IV. 全行書き生活ノートへの取り組み記録

第2筆者は、これまで生活ノート連動型学級通信を発行してきた。「生活ノート全行書き(生徒個人の取り組み)」「提出された生活ノートへの担任のコメントを読む(個人と担任との交流)」「学級通信の読み合わせ(生徒間及び生徒と担任との交流)」の3つの活動を毎日くり返すことで、3つの活動がスパイラル的に発展し高まっていくことで、目指している学級集団の育成や個々の生徒の姿に近づいていく事例を紹介した(図1)。

先行研究から、野木(前述)の示した概念図をもとに、生活ノートの機能と教師の役割を図2のようにまとめた。野木が示した2つの機能(「生徒理解のための1つの手がかり」「コミュニケーションツール」)

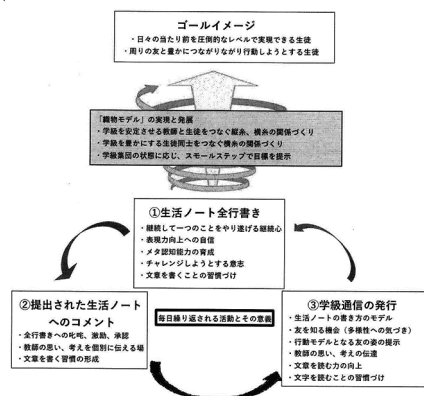


図1. 生活ノート連携型学級通信(筆者ら、2021)

に3つめの機能として「自分を見つめる力を高めるツール」を加えた。また野木は、これらの機能を高めるために教師に求められる役割を「生活ノートを用いる以前」「日々の取り組みの中」の2つの場合に分けて示しているが、「日々の取り組みの中」の内容をより具体的に示し、その結果として生徒が習得していくであろう力を具体的に列挙した。

第2筆者は毎回生徒の生活ノートへの敬意を示す意味で、文字数の多いコメントを返している。卒業式前日の最後の生活ノートに対するコメント文字数は、最小37字、最大146字、平均すると63.4字であった。たとえば、「1学期から生活ノートを書き続けたことで、生活ノートも3冊目になっている。こんなに自分が書けるようになるとは思っていなかったの、続けてきてよかった。」という内容の生活ノートには、「こちらこそ、ありがとうございました。書き続けたからこそ今です。ムリ！と決めつけない、ということでしょう。自分の可能性を求めて！(64字)」というコメントを返している。生徒の書いてきた生活ノ

トに真摯に向き合うことは、生徒が生活ノートを書き続ける大きな原動力になっていると考えるからである。生活ノートを用いる前に教師の意図を明確に伝え、生徒に目的意識をもたせるとともに、日々の取り組みの中で生徒に働きかけ続けることで、生徒が自らの成長を感じることが出来る活動にすることができると考えている。

V. 生活ノートに対する質問紙調査

1. 調査対象

地方都市の郊外に位置する公立A中学校(各学年5学級、全校生徒543名、3学年生徒186名)3年生のB学級生徒(男子20名、女子17名、計37名)。

2. 調査対象と調査方法

生徒に1年間全行書きをしてきた生活ノートに対

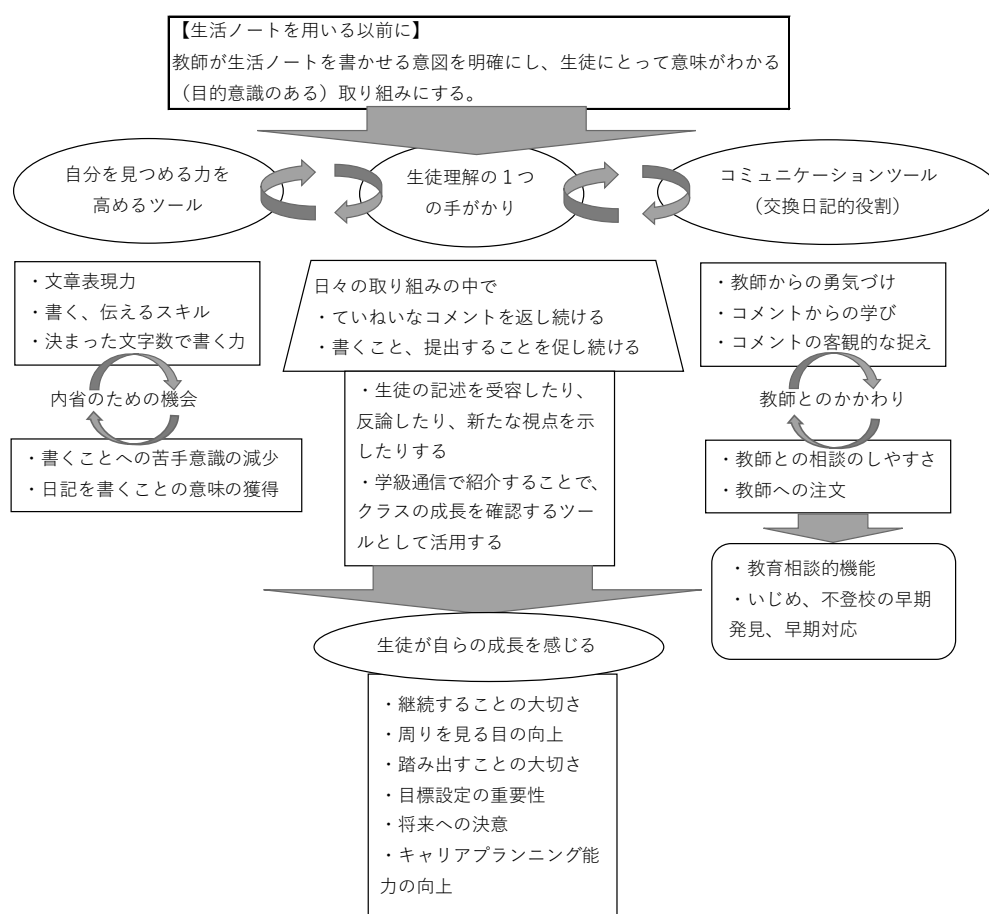


図2. 生活ノートの機能と教師の役割(野木2019の示した概念図に第2筆者が加筆)

する質問紙調査を実施した(表1)。毎日全行書きをすることへの抵抗感(質問項目1)、書き続けたときの変化(質問項目2)、書き続ける原動力(質問項目3)、継続して感じたこと・考えたこと(質問項目4)の4項目について調査した。質問項目1は4件法(当てはまる・やや当てはまる・あまり当てはまらない・当てはまらない)と自由記述で、質問項目2は4件法、質問項目3・4は自由記述での感想や意見を求めた。

3. 評価方法

項目ごとに集計し、自由記述についてはできるだけ客観的に分析するために、第2筆者と学年会の教員1名及び第1筆者とで協議して意味のある文章ごとに分解した。KJ法を参考にして整理し、カテゴリ化して分類した。

4. 結果と考察

37人中、32人から回答を得た。質問項目1・3・4については、意味のある文章ごとに分解した結果、質問項目1については81件、質問項目3については91件、質問項目4については193件の回答が得られた。質問項目1については14の小カテゴリーに分類され、4つの大カテゴリーにまとめられた。質問項目3につ

いては19の小カテゴリーに分類され、3つの大カテゴリーにまとめられた。質問項目4については20の小カテゴリーに分類され、5つの大カテゴリーに分類された(表2)。

1) 抵抗感を克服する書き続けたときの効果

書き続けることの大変さを問う項目では、平均値が2.4となり、筆者らが想像したよりも生徒の負担感は大きくはなかったようである。「継続したときに感じる10項目の内容」と同様に平均値が3.0を超えてくると想像していただけに意外な結果となった。

このような結果になった理由として、自由記述の内容から2つのことが考えられる。

自由記述の分析の大カテゴリー分類で見ても、「大変ではなかった」という思いが13.6%あった。こう感じていた生徒のほとんどは、小学校や中学1・2年生時代に先生から生活ノート全行書きを薦められ、やってみることで習慣化した生徒たちであろう。また、生活ノート全行書きを前向きに受け止め、習慣化するためにルーティン化するなど「工夫をした」生徒もいたようである。小中高連携の重要性が言われてから久しいが、子どもたちにつけるべき力を明確にした上で、それぞれの校種で何をどのように進めていくのかを具体化させていくことが重要であることが示唆される。

それに対して、多くの生徒は生活ノート全行書き

表1 アンケート質問項目(質問項目2は筆者ら(2021)による)

1. 生活ノートを「毎日」「全行書く」ことは大変でしたか。	4	3	2	1
(その理由)				
2. 書き続けたことで、自分が変わったと思うことはありますか。				
①書くことへの苦手意識が減った	4	3	2	1
②書いたり伝えたりするスキルが向上した	4	3	2	1
③文字数指定のテスト等で向上があった	4	3	2	1
④文章表現力が向上した	4	3	2	1
⑤継続することの大切さを学んだ	4	3	2	1
⑥自分の思いを表現できるようになった	4	3	2	1
⑦周りを見る目が育った	4	3	2	1
⑧日記を書くことが分かってきた	4	3	2	1
⑨高校でも日記を書いてみようと思う	4	3	2	1
⑩担当とやり取りでき、相談しやすくなった	4	3	2	1
3. 書き続ける原動力になったことは何ですか。なぜ書き続けることにつながったのですか。				
4. 生活ノート全行書きを続けてきて、感じたこと、考えたこと、学んだことを書いて下さい。				

に初めの頃は抵抗を感じていたようで、自由記述の分析の大カテゴリー分類で見ると、「初期の抵抗」に含まれる内容が37.0%あった。「初期の抵抗」の内容は、「面倒くさい・無理という決めつけ」「書く内容が見つからない」「自分には力がない」という自分へのネガティブな思い込みや、実際に生活ノート全行書きに挑戦はしてみるものの、全行埋めるのに「時間がかかる」「慣れるまでが大変」だった初期の様子が見て取れた。

しかし、初期の抵抗を感じていた生徒たちの中にも、こうなりたいという「願いがあった」生徒もいたようである。そして、生活ノート全行書きを続けるうちに、自分自身の変化に気づいていった様子も見てとれた。毎日生活ノートを全行書きすることが「自分の当たり前になった」り、全行が「書けるようになった」りすることで「自分のためになるという気づき」につながっていった様子が示唆された。また、「先生に伝えたい」という他者意識も育っていることが示唆され、これから文章力を高めていき

たいという「将来の展望」にもつながっている生徒も出てきている。

自由記述の分析の大カテゴリー分類で見ても、「初期の抵抗」に37.0%が含まれているが、「続けたときの变化」はそれを上回る44.4%が含まれており、生活ノート全行書きを続けることに価値を見出し、効果を実感している生徒たちには、今となっては初期の抵抗がそれほど大変なものだったとは感じなくなっているのではないかとと思われる。厳しい場面はあってもそれを乗り越え、生活ノートを日常のもの、生活習慣の一つにすることで、生徒たちは次の困難に挑戦しようとする力を蓄えていくのではないかと感じる。

2) 継続したときに感じる10項目の内容(質問項目2)

10のアンケート項目のうち、9つの項目の平均値が3.0を超えている(図5)。多くの生徒が、生活ノート全行書きを続けることに価値を見出し、効果を実感していることが示唆された。また、筆者らの研究

表2 自由記述による質問項目1・3・4の分類結果

質問項目	自由記述の項目件数	小カテゴリー数	大カテゴリー数	大カテゴリーの内容
1 生活ノートは大変だったか	81	14 (図3参照)	4 (図4参照)	①大変ではなかった ②初期の抵抗 ③願いがあった ④続けたときの变化
3 書き続ける原動力	91	19 (図6参照)	3 (図7参照)	①教師の働きかけ ②自分が成長したと実感できる ③将来への決意
4 全行書きの感想	193	20 (図8参照)	5 (図9参照)	①初期の抵抗 ②生徒が感じる成長 ③内省のための機会 ④教師とのかかわり ⑤学級通信との連動

【自由記述の具体的な分類方法の例】

質問項目1「生活ノートを書くのは大変だったか」では、「何を書けばいいか困った」「書くことがなかった」などの記述は、心理的に抵抗感はないものの、各内容に困っていることから、小カテゴリーの3「書く内容が見つからない」に分類し、「やりたくなかった」「面倒くさい」などの記述は、書くこと自体への抵抗であるので小カテゴリー4の「面倒くさい・無理という決めつけ」にまとめた。また小カテゴリー3・4をまとめて、大カテゴリー②「初期の抵抗」と命名・分類した。

表3 生徒の「毎日全行書きをすることへの抵抗感」についての自由記述(全回答81)

意味のまとめ	主な内容	割合%
1 以前から取り組んできた	・小学校の時、担任の先生が「中学になったら全行書きなさいと言われるかもしれないから、今から練習しときな。」と教えてもらって、それからずっと続けてきたので、あまり大変ではなかった。	12.3% (10件)
2 工夫した	・毎日テスト勉強の前に書くというルーティンを作っていたので苦ではなかったし、大変でもありませんでした。	1.2% (1件)
3 書く内容が見つからない	・話題がない時には、生活ノートだけで1時間近くかかってしまったこともある。	11.1% (9件)
4 面倒くさい・無理・決めつけ	・最初は毎日全行書きをしと言われて、「全行なんか書けるわけがない」「全行なんて面倒くさいから、書くなんて面倒くさい」と思っていた。	9.9% (8件)
5 大変だった	・最初の頃は、もちろん大変でした。	6.2% (5件)
6 自分には力不足	・昔から文章を書くのが苦手で、生活ノートなんて全然行が埋まらない人間でした。	4.9% (4件)
7 時間がかかる	・なかなか頭の中で文が組み立てられないときは、だいぶだいぶ時間がかかった。	3.7% (3件)
8 慣れるまで大変	・土日にも書くことは2年間やってこなかったもので、慣れるまでが大変でした。	1.2% (1件)
9 願いがあった	・毎日書くことで表現力をつけたかったから。	4.9% (4件)
10 書けるようになった	・ちょっとしたこと、気づいたこと、うれしかったこと、楽しかったことなどの細かいところを書いていくうちに、いつの間にか全行埋まっていたり、次のページにいったりしていた。	19.8% (16件)
11 当たり前になった	・だんだん当たり前になっていって、自分も大変じゃなく、書いて当然だと思うようになったので、そこまで大変だとは思いませんでした。	14.8% (12件)
12 先生に伝えたい	・これを先生に教えたい、伝えたいと思うものが多く、書くのは全く苦ではなかった。	4.9% (4件)
13 自分のためになるという気づき	・1ページに収まらないくらい書けるようになったり、日々をすぐに振り返ることができるようになったりと、いいことばかりだったというのも大変ではなかった秘訣なのでは、と思います。	3.7% (3件)
14 将来の展望	・これからも何か書くことがあれば、全行書くことを意識して、もっと文章力を高めていきたい。	1.2% (1件)

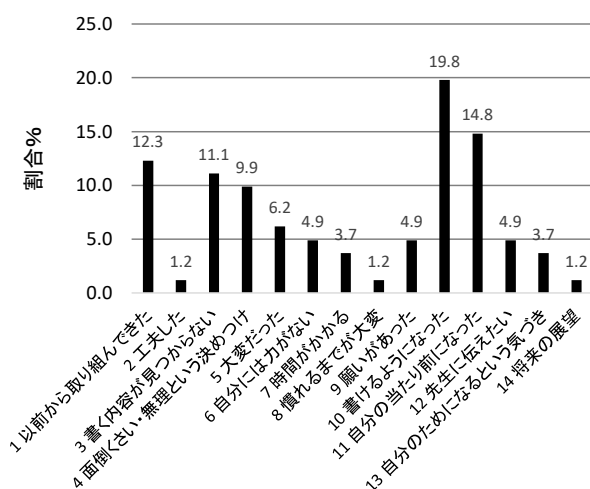


図3. 「毎日全行書きをすることへの抵抗感」自由記述(小カテゴリー)

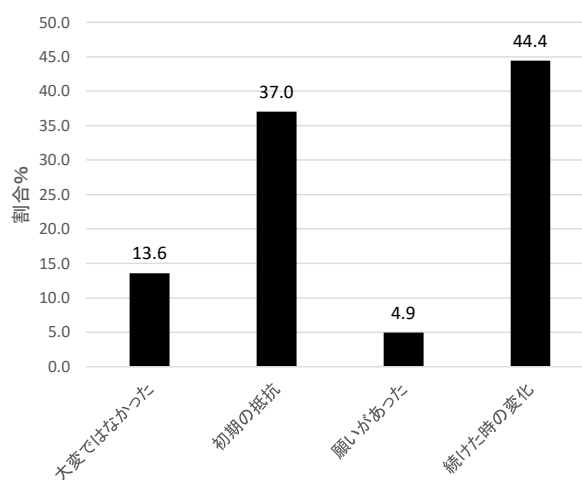


図4. 「毎日全行書きをすることへの抵抗感」自由記述(大カテゴリー)

によって抽出された項目の有効性を改めて確認できた。唯一、平均値が3.0を超えなかった「高校でも書く」については、教師のかかわりの重要性を示すものだと考えられる。生活ノート全行書きの有効性を感じてはいるものの、書き続けることを促す他者からの働きかけや、書いた内容に対する他者からのコメントがもらえない状況下での継続を考えると、これからも続けられるのかと不安視したり、一定の効果をえた現状に満足してしまったりしているのではないと思われる。

3)書き続ける原動力となる教師のかかわりと成長の実感

生活ノート全行書きを続ける原動力になったこととしては、「教師との関係」「成長の実感」「達成感」「プライドの確立」「チャレンジ心の芽生え」「将来への決意」が抽出された。

「教師との関係」では、まず「課題として提示」し、なぜ全行書きをさせるのか「根拠を示す」「教師の経験を語る」ことをしながら、毎日全行書きしてくる「生徒の行動に答えるコメント」を返し続ける。時には、生徒のその日の行動や生活ノートの文章の良さに触れたコメントを返すことで勇気づける。学級通信を活用して生徒の生活ノートを公開することで、自分とは異なる視点に触れ、自分の考えを知ってもらう場ができ、採用された時の喜びを感じるようになる。この一連の取り組みが毎日繰り返されることで、生徒は「先生に伝えたいという思い」をもつとともに、「自分が成長したと実感する」ようになることが示唆された。

生徒が成長を実感した内容としては、「文字指定のテスト」で書けるようになったり、点数がとれるようになったりしたことや、「文章表現力」「継続力」

「周りを見る目」「自分を振り返る力」が育ったことなどが抽出された。

そして、生徒は自らの成長を実感することで、生活ノート全行書きを「自分の当たり前」とし、「続けてきたプライドを」を感じるようになっていく。高校でも続けていこうとする「将来への決意」をもつようになるのだろう。

4)継続して感じたこと・考えたこと

筆者らの研究(2021)によって抽出された10項目である「継続することの大切さ」「具体的な場面での効果」「文章表現力の向上」「書くことの意義の発見」「将来への意識」「具体的なスキルの向上」「周りを見る目の育成」「自分の思いを表せる」「教師との関係性の創造」「苦手意識の減少」が上位を占めた(表5)。生活ノート全行書きを1年間継続させたことで、生徒が自分自身の能力の高まりを感じていることがあらためて示唆された。

今回のアンケートからは、教師の役割に関して、「教師との関係性の創造」としてカテゴリー化した単純な教師と生徒の双方向のコミュニケーションツールとしての役割だけでなく、「教師の勇気づけの重要性」「教師のコメントからの学び」「教師の働きかけの客観的捉え」といった教師のコメントについてのカテゴリーが分類された。教師のコメントによって勇気づけられ、ここまで続けられたという生徒の言葉からは、生徒とともに併走する教師の存在の重要性が示唆された。

前述の通り、第2筆者は毎回生徒の生活ノートへの敬意を示す意味で、文字数の多いコメントを返してきた。「教師のコメントからの学び」「教師の働きかけの客観的捉え」からは、このようなコメントの効果を示唆していると考えられる。

書く内容を教師が指定したときには書きやすかったという「教師への注文」もあった。教師は、コメントを通じた生徒への示唆とともに、生徒に考えてほしい共通の話題を生活ノートのお題にすることを定期的に考えていっていいだろう。第2筆者のように、生活ノート連動型学級通信を発行している場合には、このお題に対する生活ノートを学級通信に載せることで、学級世論を形成する紙上討論を仕掛けることもできる。このことは、今回のアンケートでも「学級通信との関連性」「クラスの成長確認の手段」としてカテゴリー化されている。

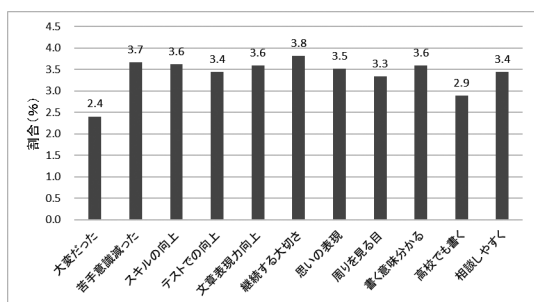


図5. 生徒の「書き続けたときの变化」についての各項目平均値

表4 生徒の「書き続ける原動力」についての自由記述(全回答91)

意味のまとめ	主な内容	割合%
1 生徒の行動に応えるコメント	・自分の日記に書いたことや問いかけた質問に、先生がしっかりと反応して書いて伝えてくれたり、それを取り上げてくれたりしたことです。	17.8% (16件)
2 課題を示し支える	・最初は、先生が「全行書きをしてね」と言っていたので、全行書かなくてやり直しになるくらいなら全行書いた方が後々めんどうにならないよ…と思って無理矢理書いていた。	13.3% (12件)
3 学級通信を発表の場にする	・みんなの日記を見ることで、自分とは異なる視点に触れ、自分の考えを他の人にも知ってほしいと思うようになった。	8.9% (8件)
4 根拠を示す	・先生が、生活ノートを全行書きすることで、作文とかテストとかで楽だからと言っていたから。	3.3% (3件)
5 生徒が伝えたい存在になる	・先生が日記を通して、身近な話しやすい存在になって、相談などがしやすくなり、書きたいことが増えた。	3.3% (3件)
6 勇気づける	・文を書くことは好きだけど自信がなかったが、そんな時に(先生が)褒めてくださったことで、前より自信がもてるようになり、文を書くモチベーションにもつながった。	3.3% (3件)
7 経験を語る	・2年の理科の授業で、吉岡先生の言っていたことを素直にしていたら、理科の点数が高くなったので、吉岡先生のことを信頼していた。	1.1% (1件)
8 チャレンジ心の芽生え	・最初は嫌でもだんだん慣れていって、最終的に自分にどんな力がつくのかを知りたかったし、達成感を味わいたかったから。	13.3% (12件)
9 続けてきたプライド	・毎日全行書きをしていたので、ここで連続しているのを終わらせたくないという気持ちが出てきたから。	6.7% (6件)
10 具体的な場面での成果	・国語の記述問題で点が取れるようになった。	5.6% (5件)
11 自分の当たり前になる	・やってみようと思い、少しずつ始めていくと、逆に全行書かないと落ち着かないくらいまで変わっていきました。	4.4% (4件)
12 自分を振り返る力がつく	・自分のことをどんどん振り返ることができるようになってきた。	3.3% (3件)
13 伝えたいという思い	・その日1日に、日記に書きたい、先生に聞いてほしいと思えるようなことがたくさんあった。	3.3% (3件)
14 文章表現力の向上	・この継続心のおかげで、私は毎日全行書きを続けることができ、文章力も少しは上がったと思う。	2.2% (2件)
15 継続することの大切さ	・継続することはすごいな、大切だなと思いました。	2.2% (2件)
16 周りを見る目が育つ	・始めは生活ノートを埋めるために、周りをよく観察していたけれど、だんだん人の良いところが勝手に目に入ってきて、気づけば書いていた。	2.2% (2件)
17 達成感を感じる	・考えて思ったことを私の言葉で書いて振り返ると、「これだけ書いてきたのか」という達成感があった。	2.2% (2件)
18 日常生活への位置づけ	・生活ノートを書いてから勉強をするというルーティンができていたので続けられた。(サボってしまった日もあったけど。)	1.1% (1件)
19 将来への決意	・これからは日記以外でも、なるべく全行書きができるように努力したいと思う。	2.2% (2件)

また、今回のアンケートからは、「自らの成長の認識」「踏み出すことの大切さ」「目標設定の重要性」など、「継続することの大切さ」「周りを見る目の向上」だけではない自らの成長を感じている生徒がいる。何か1つのことをやり遂げた達成感や充実感は、確実にその生徒の自信となり、新たなチャレンジへと向かわせるのではないかと期待している。

VI. 全体考察

本研究の目的の一つは、生活ノートの全行書きの実践が、生徒たちにどのように受け止められ、どのような効果をもって可能になっていったのかを検証することであった。全行書きすることへの抵抗感は実践の初期において強く、その取り組み方のみならず、面倒くさくて無理であるといったあきらめを感じる生徒も多かった。しかしながらこうした「初期の抵抗」の値を上回ったのは「続けた時の変化」の割合であり、特に「書けるようになった」「生活の中で当たり前になった」「自分のためになった」などの項目が著しい。全行書きを進めるために行った支援・指導としては、試験などで出題される記述問題への抵抗を減らすことのみならず、書くことで自分を見つめ、自らの思いを明確にしていく力をつけることを念頭に、①必ず手紙型の長文のコメントを書くこと、②毎日学級通信で内容を紹介すること、③その

学級通信を学級内で読み合わせをすることなどがあげられる。こうした教師とのコミュニケーションが、「先生(や仲間)に思いを伝えたい」という動機にもなっているのではないだろうか。従って、学級内の学習や生活上の問題などについて共通理解したり、時には紙上学級会などのように、解決に向けて学級が動き出したりするきっかけにもなっていたと思われる。また同時に全行書きは、自分についての考察に繋がる側面を多々持っており、書けるようになるほど、自己分析的な内容も増えていったという実感がある。学習や人間関係、進路の問題など、誰もが直面するであろう発達課題を、教師や仲間と共有する機会になったに違いない。

またこの全行書きを毎日1年間継続したことの意義として、個人的な内容であれ、学級全体にかかわる内容であれ、その話題や問題提起が継続されることの効果があげられる。それによって学級全体が共通の話題で意識化され、集団の凝集性が高まったように実感している。学級集団の親和性などのアセスメントを実施したわけではないが、生徒同士や生徒と先生が互いを知って、理解しあうことは集団づくりの基本である。生活ノートの継続によって、こうした機能が十分に働いたものと思われる。

筆者らは、生活ノートと連携させた学級通信の教育的効果とその意義の中で、「生徒が継続的に生活ノートに取り組むためには、日々提出される生活ノ

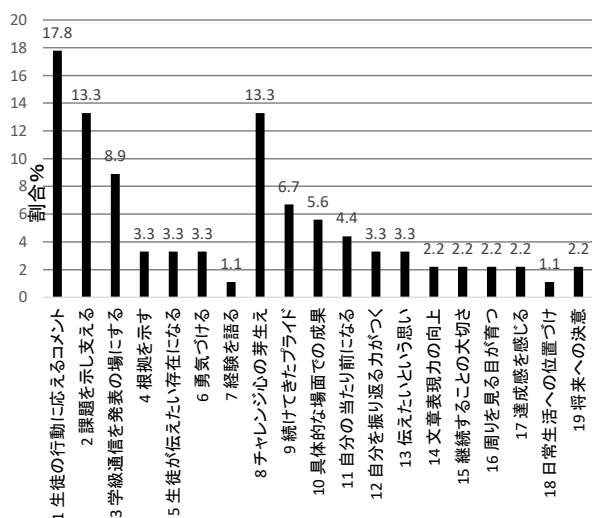


図6.「書き続ける原動力」自由記述(小カテゴリ)

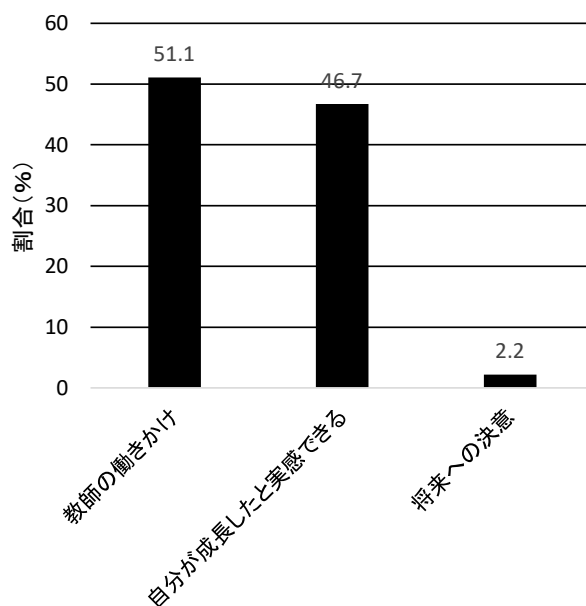


図7.「書き続ける原動力」自由記述(大カテゴリ)

表5 生徒の「継続して感じたこと・考えたこと」についての自由記述(全回答193)

意味のまとめ	主な内容	割合%
1 初期の抵抗	・いざやってみると、やっぱり時間がすごいかかって、なんでやっているんだろうというくらいに思っていた。	2.6% (5件)
2 継続することの大切さ	・1学期の時いやだった全行書きも、本当に意味のあることだったんだなあ～と実感することができました。	18.1% (35件)
3 将来への意識	・ここでつけた力を、この先も「伝える」「書く」という場面で生かしていきたいと思う。	6.7% (13件)
4 周りを見る眼の育成	・日記に何を書くかで、周りを見るが増えたので、周りに目を向けることが増え、力がついたと思います。	6.2% (12件)
5 自らの成長の認識	・自分が1. 2年生の時にいらなかったと思っていたことをしただけでこんなにも変われるんだと思いました。	4.7% (9件)
6 踏み出すことの大切さ	・1つできれば2つ、3つ…と、どんどんできることが増えていくんだなと思いました。	2.1% (4件)
7 目標設定の重要性	・目標を立てるか立てないかでも、その達成した後の達成感や結果に大きな差が生まれてくる。	1.0% (2件)
8 具体的な場面での効果	・前は一番苦手な教科が国語だったんですけど、文章を書く力がついてから自分の中で自信のある教科にすることができた。	15.0% (29件)
9 文章表現力の向上	・毎日書き続けていると、書きたいことがたくさんできるようになって、文章力が向上したと思う。	8.3% (16件)
10 書くことの意義の発見	・毎回どうだったかを振り返ることで、明日の自分に活かして行ける最強のアイテムが生活ノートなんだと僕は思います。	6.7% (13件)
11 具体的なスキルの向上	・初めは生活ノートを書くのが嫌だったし、時間がかかるものだったから後回しにしていまいがちだったけど今では一番速く終わるから、書けるようになったんだなと実感できた。	6.2% (12件)
12 自分の思いを表せる	・1つのものごとに対して、たくさんの意見を上げることができるようになりました。	4.1% (8件)
13 苦手意識の減少	・最初の頃は、こんなに文章をつくれなくて書けない、と自分で思っていたけれど、続けていくうちに苦手意識が減ったので、続けてきてよかった。	2.1% (4件)
14 教師の勇気づけの重要性	・1人だどこまで継続することは無理だったと思いますが、吉岡先生が毎日分返事をくれたので、ここまで続けてこられたのだと思います。	5.2% (10件)
15 教師との関係性の創造	・直接はあれでも、日記を通すことで、趣味の共有や相談、自分の考えなどが伝えやすくなって、先生とのコミュニケーションをとるのにとてもいい手段だと感じました。	3.6% (7件)
16 教師のコメントからの学び	・自分の考えに対して感想や違う視点での考え、問いや新しい知識をもらうことで、自分の世界が広がった。	2.1% (4件)
17 教師の働きかけの客観的捉え	・次の吉岡先生のクラスにも、僕と同じように国語が苦手だったけど、得意になったという人がいるんじゃないかなと思います。	1.0% (2件)
18 教師への注文	・先生が内容を指定してくださった時は書きやすかったのですが、もっと指定してほしいなと思った。	0.5% (1件)
19 学級通信との関連性	・学級通信で、クラスの皆の意見や考えから自分に置き換えてみて、改めて考えることができたので、学級通信と毎日の生活ノートがセットとして私を成長させてくれたと感じている。	2.1% (4件)
20 クラスの成長確認の手段	・よりクラスや自分を良くしていくための、1つの大切な素材になったと思う。	1.6% (3件)

トに教師がどのように対面するのかという点と、提出された生活ノートの内容を学級内にどのように広げていくのか、という2点が重要になる」と指摘している。本実践でも、「生活ノートの機能と教師の役割」で示したように、教師が日々の取り組みの中で「ていねいなコメントを返し続ける」「書くこと、提出することを促し続ける」ことの必要性が示唆されている。また、学級通信を活用して学級内の仲間の思いや考えを広げていくことの有効性も示唆されている。生徒の能力を開発し伸ばすために、生徒が生活ノート全行書きに毎日取り組むことは大いに意味のある活動であろう。

しかし、近年の教師の勤務実態の厳しさや働き方改革の流れの中で、生活ノートに対してコメントを書く時間の確保が難しくなっている実態がある。そのため、生活ノートを書く意味や目的意識をもたせることなく学校生活がスタートしたり、提出された生活ノートに対してサインだけで返却したりすることで、時間の経過とともに提出しなくなる生徒が増えていく事態があるのではないかと危惧している。

森川(2011)⁷⁾は、「日記には毎回たくさんのコメントを書くものという意識を捨てる」とした上で、コメントするときのポイントとして2つの型を使い分けることを提案している。2つのコメントの型とは、コメントを短くサッと書く「一言メッセージ型」とじっくりと手紙を書く「手紙型」である。第2筆者のコメントは、手紙型に属するものだろう。そして、

日記指導を継続させるためには、教師が続くことが大前提だとして、『毎日のコメントは基本として長々と書かない。しかし、「勝負の日記」のときは、しっかりと子どもたちあてにメッセージをのせた「手紙型」を書く。そのようなスタンスです。頻度としては、手紙型は学期に1、2回程度。』とし、日記がどんどん好きになる魔法の言葉がけ(コメント)の具体的な例とその場面を提案している。前述の岐阜県教育委員会「心の架け橋」にも教師のコメントについての記述があり、大いに参考になる。

第2筆者のように、手紙型にこだわり日々の生活の中で時間を生み出さそうとしなくても、この2つのコメントを上手く使い分けることで生活ノートの指導に継続的に取り組んでいけるのではないだろうか。また、現在はコロナ禍によって急速に配備が進められた1人1台のタブレット端末の活用が考えられないだろうか。生徒がタブレットに入力する形になれば、教師が読んでコメントを書く場所や時間帯が、ノートのときよりも教師自身で柔軟に決められるようになるかもしれない。担任だけが生活ノートを読むのではなく、担任と副任の2人で分担して読んでコメントを書くようにしたらどうだろうか。ただし、分担して読む場合には情報の共有が絶対に必要になるだろうし、生徒にも2人で読ませてもらうことを事前に伝えておくことが必要だろう。

ただどのような形をとるにしろ、森川の「コメントにはマニュアルは存在しない」という言葉を肝に

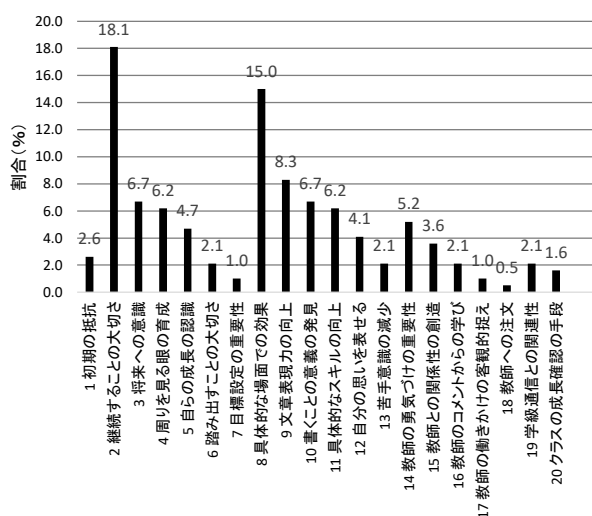


図8. 「継続して感じたこと・考えたこと」
自由記述(小カテゴリー)

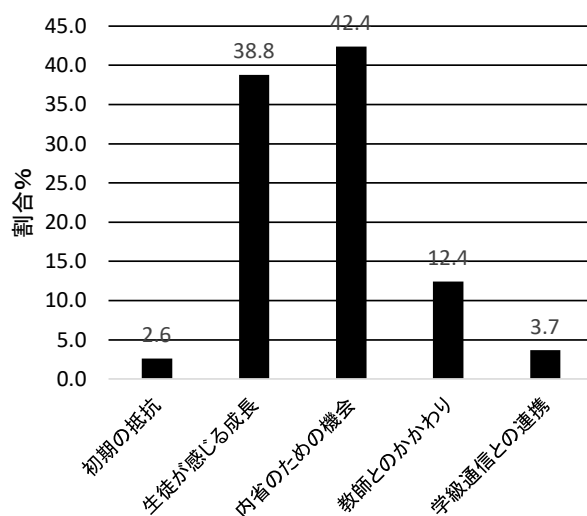


図9. 「継続して感じたこと・考えたこと」
自由記述のまとめ(大カテゴリー)

銘じておく必要があるだろう。「日常、いかに子どもたちと会話しているか、ということです。日記指導は日記指導だけ独立しているわけではありません。」「コメント・言葉がけは、その子のためを思って発せられた言葉であり、そしてそれがその子に届いているか、が大切なのです。」として、教師の書くコメントの意味も同時に示している。野木(前述)が述べているように、生活ノートは生徒とのコミュニケーションツールであり、生徒理解の1つの手がかりである、ということだろう。

先行研究から、「教育相談的機能」「キャリアプランニング能力の育成」「いじめ・不登校の早期発見、早期対応」に生活ノートが有効に機能していることが示唆されている。また本研究でも、「書くことへの苦手意識の減少」「日記を書くことの意味の獲得」など「自分を見つめる力を高めるツール」としてだけでなく、「継続することの大切さ」「周りを見る目の向上」「踏み出すことの大切さ」「目標設定の重要性」「将来への決意」など「生徒が自らの成長を感じる」ことができるツールとしての生活ノートの機能が示唆されている。現状の教師の勤務状況の厳しさから、生活ノートを教育実践の1つのツールとして位置づけて活用することをやめるのであれば、これまで述べてきたような生活ノートの教育的効果と機能を理解した上で、その効果を補う他の方法を準備すべきであろう。

文献

- 1) 岸田幸弘・吉岡典彦, 「学級通信の教育的効果とその意義～生活ノート連動型学級通信の実践事例～」『松本大学教育総合研究第5号』p.191-206(2021).
- 2) 野木紹吾, 「中学校における生活記録ノートの機能と教師の役割～生徒の記述を手がかりにして～」『山梨大学教職大学院平成29年度教育実践研究報告』(2019).
- 3) 岐阜県教育委員会, 「心の架け橋～Heart to heart～」(2015).
- 4) 千葉県教育委員会, 「不登校児童生徒の支援資料集」(2018).
- 5) 竹島ゆかり, 「感情の言語化を意識した中学生と学級担任との『交換日記』の実践—心的安全空間を広げる手立てとして—」『平成25年度高知県大学院派遣教員研究報告書(2013)』.
- 6) 渡部文子, 「中学生のキャリアプランニング能力の向上を目指した生活記録ノートの活用の工夫」『秋田県総合教育センターあきた型キャリア教育平成29年度研究員による研究(2017)』.
- 7) 森川正樹, 「クラス全員が喜んで書く日記指導～言語力が驚くほど伸びる魔法の仕掛け～」明治図書(2011).